



発情SWEET

ADULT ONLY

発情SWEET





モナジ

発交大王道
七松建司 5P

レシイ落書
21P

ラヴレターフロム
ハニービスケット
村岸健太 25P

ああ情期になつてあつてしが
 発情な感じがするああ
 ま辛辛するぎああ
 辛辛するぎああ
 苦しい胸と股
 思張りと胸と股
 がは張り胸と股
 俺は出し裂けに
 俺は出し裂けに
 何が出るイに？
 俺は出し裂けに？
 ナ俺は出し裂けに？！



情 発交大王道

性

早くかえれ
 早くかえれ



いこつ
ままて
—つわ
つたけ
!!!だ

カッポーン!



ト...

ククウ...

あ...い...い...い...い...

カッポーン!

カッポーン!



うわあ…甘
いい匂い…

はっ

はっ
はっ
はっ

体調
大丈夫か？



！レシーから
抱きついて
くるなんて…

ごしゅじんさまあ
おかえりなさい…

た、ただいま
遅くなって
ごめんな



ああもう
可愛いっ

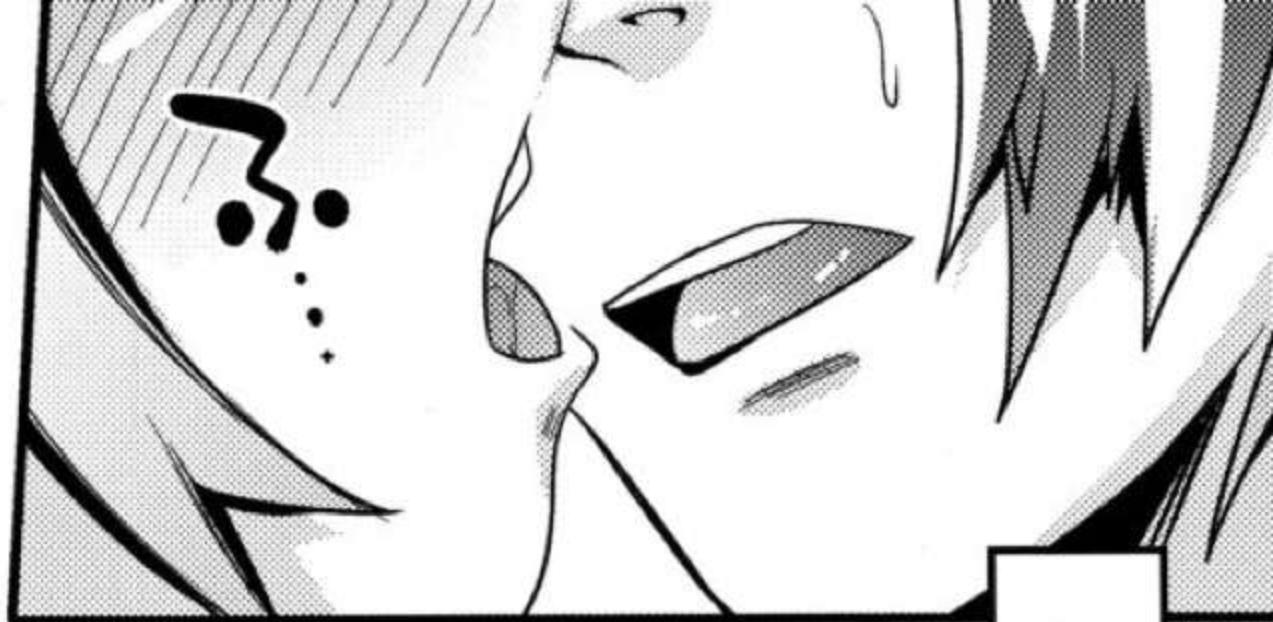


潤んでるのに
瞳がいつもより深い
色してる…

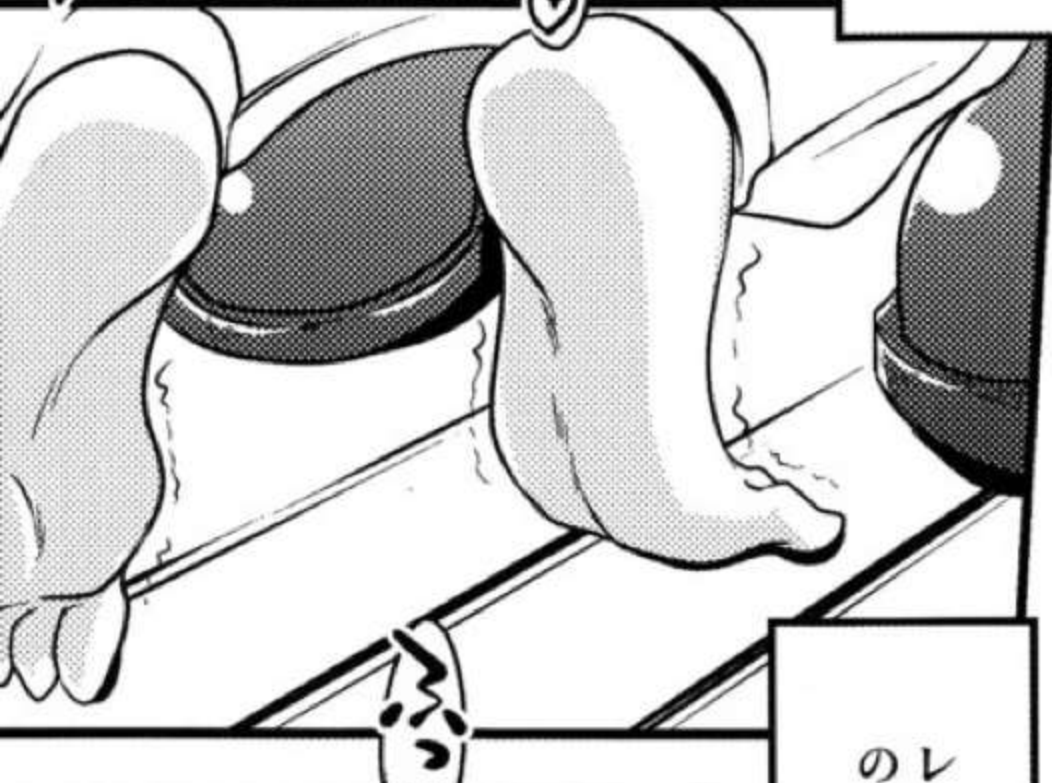
吐息が顔に
掛かって
くすぐった
気持ちいくて…



えっ…おっ
たどたどしい
けど



!?



レシイから
のキス



絶対して
くれないのに

普段は
頼んだって
恥ずかしがって







あつ...あ
ボク...ご主人さま
こんな
はしたない...

あきれれますよね
いくら発情期
だからってこんな...

キスだけで...
いっちゃった?



俺も、お前とのキス…
可愛くて…愛しくて
いきそうだったよ

そんなこと
ないよ



だから
別に…



あ…ああ
ご…ご主人さまのお
ご主人っ…さまの
お、おちんちんっ

レ…
レシイ?



！ちよつ……うふお！
レシイつそつ深

ふおつぐつ！！

to-20

to-20

to-20

to-20

to-20

to-20

to-20

to-20

to-20



ごひゅひんひやまあ…
気持ち良いれひゅは？

ああ…っ
凄い
気持ちいいよ



ああっ
嬉しいれひゅ！



ちよっ
レシイっ
激し…っ！

うおっ…くっ
レ…シイっ
でるっ！





あつ…あ
ボク…またあ

ご主人…さまに
かけ…られたっ
だけで…いっちゃ…

びびり
びびり



あの…あ…
ボク…

あ…あ…
ご主人さまあ

気持ちよかったよ
レシイ

びびり



俺も…
レシーの中に
出さないと
満足できないよ

お前が満足
するようによ…



まだ満足
できないんだろ？

肝心なところに
出してあげて
ないもんな



お前が
して欲しいように
犯してあげるから

は…ひ

どうして
欲しい？



いつもと…違って
あのっ…後から…
メトラルらしく
犯して欲しいですっ

あのっ…
あっあの

レシイ
俺もう…

お前が
泣いたって止め
られないよ？

ゴッゴッ
♡

はひ…っ

いっばいっ
泣かして
ください

ホクっ…
ご主人さまになら…
いっばい…泣かして
欲しいです

ああ

ゴッゴッ
♡

ゴッゴッ
♡

ゴッゴッ
♡

ゴッゴッ
♡

ゴッゴッ
♡





レシイっ

好きだっ
好きだっ

TOHO



レシイっ

レシイっ

TOHO

駄目...っ
れひゆうっ
そんな...事っ
言われたらあつ



好きだっ
言いたいっ

TOHO



でも...俺
お前が可愛いっ



うっ...嬉しくてえ

言われる
らけれっ
いっひやい
ますうっ!!!



レシイ好きだ

好きだよ

大好きだ

ああっあっ!!
ごっ...
ご主人さまあっ!!

ボクもっボクも
好きですっ!!

あーっあーっ!!
あーっあーっ!!
あーっあーっ!!

大好きいつ
愛してますうつつ!!!!

レシイ...っ、俺もっ!!
レシイっ、レシイっ!!



…俺も発情期が
うつつたかな？
お前と…まだ…
もったしたいよ…

ご主人さま
いつもじゃ
ないですか

ごっご主人さま
怒ってません!?

全一然

うっ嘘っ

あばばばば
んんんんん

レシィ落書きのページ

というわけでの落書きですが、今回はまあ本自体もいつもと違う毛色を気取り腐って勘違いなので落書きもいつも描かない、また今後も描かないだろうというモノで行きたいかなと。

角有りレシィ

もしも細州たかしがサイレンだったらレシィの角が病気で切られなかったら。ですな。

メトラルさんは草食動物なのに狩りとか行くワイルダーなんてレシィもきっと今と全然違うヤンチャっ子になるんでしょうなー。まーこのまま成長すると末はヤッフアさんみたいなムキムキングにクラスチェンジですごくゾツとしない。ちなみにサモ世界のヤンチャっ子はアルバといいリュームといいヤッフアさんといい皆脇だしタンクトップなんでレシィもそうしてみました。レシィのガードの固い脇が常に無防備に晒されるとか素晴らしいと思いますけどどうですよ？



ロングレシィ

髪伸ばしレシィですな。
家事してる時には邪魔なので
団子にしたりポニーにしたり、
そして夜はマグナがリボン
をスッと解いて
下ろした状態で弾丸フィーバロン。
んでレシィの中で髪下ろすのは
マグナとエッチするときだけなので
髪を下ろすと思い出してムラムラ
してきちゃう、などの王道プレイが
楽しめるわけてロングは素晴らしいな。



ショートレシィ

芋天使（ポテトゥエル）の
散髪はどいつも漏れなく
じゃがいもヘッドです。
ボウズから半年、やっと大分
伸びてきました。



ロビンレシィ

マスクを被っても角は飛び出すのは
超人の常識。
つか角だらけだな、角好きなボクですが
こないらん。過ぎたるは及ばざるが如し、
つかまずロビンの仮面自体がいらぬ。



ワン子レシィ

こういうブラックなレシィを描くのは
初めてかもしれない……。



完全発情レシィ

完全発情状態のメトラルさんは性的刺激がないと大変な事になってしまうのでずっとバイブとかで弄り続けてあげないといけないんだけど、バイブじゃ我慢できなくなったレシィは雄の匂いを求めて街の酒場に。そこで屈強な男たと大乱交。んでやってる最中に発情期が終るんだけど男たちは満足せずレシィを今度は無理やり犯すかたちに！マグナへ助けと謝罪の言葉を叫びつつ肉欲の波に翻弄されるのであった。

みたいなのを
発情期テーマなら
描くだろ普通。
と思うんですが
自分には無理です！
つかマグナが
寝取られてる姿とか
間抜けすぎてもう…。



ラヴレターフット
ハニービスケット

村岸健太

マグナだってケーキは好きだ。彼の先輩のような病的な甘党ではないが、それでも季節の苺が乗ったショートケーキを見れば何となく美味そうに思うし、チョコレートやクッキーといった甘味菓子類は日々の生活において不可欠であると思っている。他方、塩っぱいものだってマグナは好きで、彼の生活の根底を支える食事を拵える恋人に知られれば叱られると判っているから、ごく稀に、こつそりと邸を抜け出して行くに止めているが、夜鳴きの蕎麦を啜るのもまた幸せで、特に寒い夜などに鼻水が垂れそうになるのに往生しながら啜る蕎麦の味には何とも満たされる。

悪食ということもない、と思っている。健全な食欲は健全な肉体に宿るものである。そう考えれば恋人をはじめとする、俺の周りにいる人たちは、俺が腹を空かせ、物を食いたいと思うことのある種の祝福を持って出迎えてくれるのではないか、そんな相手前勝手なこともマグナは考えて、息を潜め、腕組みをしていた。ネスティの机に乗った、フルーツタルトを前にして。

ネスティには大きすぎるサイズだ。誰が作ったものかは知らないが、ネスティにこんな大きなタルトはもったいない。ピースでこのサイズならば、ホールでは一体どれ程大きいのだろうと何だか不安に駆られるようなサイズの其れには、ラズベリーブルーベリーストロベリー、ふんだんにトッピングされ、昼と夜との境の時間にきらきらと輝いている。昼食はもちろん恋人の作った弁当を綺麗に平らげてもなお、この時間になれば口寂しさを覚え、だから大体はビスケットなどでそれを慰め、邸に戻ってからの夕飯に備えるのだけだ。

「あれー、こんなところに美味しそうなタルトがあるなあ。ネスティ……、は居ないのかなあ」と独りで言っ、周囲を見回す。人の気配は無い、とりわけ、側にその存在があるだけで何とも言えず肌がひんやりする、恐ろしい兄弟子の姿も無い。

ぐう、と腹が鳴った。「全く、ネスティがこんなにたくさん食べられるわけがないのになあ、何処の誰なんだろうなあ……」と口にして、もう一回きよきよきよと用心深く辺りを窺う。派閥の館の一角では現在勉強会の真ツ最中であり、本来この部屋に居るはずのネスティら召喚士たちの大半はそれに参加している。本来ならばマグナも参加していなければならぬのだが、何故だか彼は此処に居る。要するに偉大なサボタージュである。

面倒事から逃げた上でこんな美味しそうなケーキに巡り逢えたことを冷静に考えれば、神様の贈り物であるはずもない。これを食べればきつと悪いことが起こるんじゃないのかということくらいには、信じるものは恋人ばかりというマグナだっで考えが及ぶのだ。しかし自制心を発揮するためには、目の前のきらきら輝くベリータルトは魅力的に過ぎた。妖精あるいは悪魔、いずれにせよサプレスの力が介在するように思えるのだ。

しかし、それはそれで、マグナはもう一度周囲に動くものがないことを確かめる。いいじゃない。食べてから考えればいい。そう思い決めて、皿ごと持ち上げて、見た目以上にはヴォリューム感のあるタルトに齧り付いた。「……んん」

毎日、家事が得意な恋人の美味しい食事を口にして過ごしていれば、自然、舌は超える。軽やかでいてしつかりとした生地、歯触り、果実の弾けるような香り、爽やかでいて何処か魅惑的な食感と風味が満ちている。確かな料理の腕が感じられた。いささか甘さが強すぎる気もするが。

「……でも、うん、……美味しいな」「そうか、美味しいか、良かったな」ひんやりとした空気を、首筋に感じて思わず振り向くと、勉強会で用いたらしい書籍や書類の束を左手に抱えたネスティが、ドクダミの匂いの笑顔で顔を浮かべて立って居た。口一杯にタルトを頬張ったままのマグナは明らかに食べかけのフルーツタルトをそつと皿に戻し、元在ったようにネスティの机に戻し、一歩、二歩、三歩、横に距離を取って。

脱兎の如く逃げを打つことまで、ネスティには手に取るように判るのだった。呆気なく襟首を掴まれて、其処から二時間半、即ち勉強会と同じだけの時間をお説教に充当された。曰く、何て意地汚い真似をするんだ、君に人間の尊厳と言うものは無いのか、大体こんなのは盗人のすることじゃないか、召喚士としての資格を疑う、……さすがにもうこれ以上は何も出ないというくらいこつてり搾られた油滓のようになって呆然と座り込んだマグナのもとに「あ、マグナ居たんだ」と顔を覗かせたのはルウである。

「……ああ、何だ、ルウか。珍しいね、どうしたの」「『何だ』とはご挨拶ねえ。せつかくルウが特製のタルトを作ってきてあげたのに」

バスケットの中から取り出すのは、ネスティの机の上で見たものと全く同じフルーツタルトであった。正直、今一番食べたくないものであると思う。が、ルウが「食べて食べて」とフォークを握らせるものだから、まさか「嫌」とは言えないだろう……。

こうしてサプレスからの復讐は観面にマグナを直撃した訳だが、誰も彼に同情はしないだろう。

レシイだつてつまみ食いくらいすることはある。意地汚いな、いけないな、そう思つては居ても、食事の支度をして居る時点でもう十分すぎるくらいおなかが空いているのであつて、そんなときにはほんのちよつと、例えば、白身魚のぶつ切りフライを作つたときなら、誰にもバレないようにじつこを少しぶつかいて、さくさくと香ばしい自分で自分を慰めるくらいなのだ。或いは、サラダに使うトマトの一切れを、側のアメルの気を逸らしながらこつそりと。しかしそんなことを誰が責めようか。アメルはアメルで芋を使った料理の時には大抵つまみ食いをして居るのだし、厨房に籠る彼らだけではなく、料理がテーブルに運ばれこの邸で暮らす面々が揃うまでの間に、ギブソンだつてミモザだつてつまみ食いをして居る。一度だつてそんな無作法をしたことがないのはネステイくらいなのだ。

さて。鱈のトマトクリームスパゲッティはレシイの得意料理である。程よく解れた淡白な鱈の身にまろやかな酸味塩味のソースが絡み、上手に茹で上げられたパスタと共に一度口に運べば邸の誰もがその美味さにフォークが止まらなくなる。

皿洗いをするのもレシイの仕事ということになつて居るから、邸の者たちの飯の食べっぷりもおのずと彼は判る。もちろん彼の料理の腕は素朴であるとともに秀麗なるものであるから、家人たちが夕飯を残すことはまずないと言つてよかつた。食のそう太いほうではないレシイを除いても若い男が常時三人居る邸でありミモザもよく食べるほう——そのくせいつも体重を気にしている——だから残り物が出ることはあまりない。

パスタのときにはバケツトを切るのが習慣である。レバーペーストとガーリックで香味付けをしたバターを添える。シンブルだが、それで皿に残つたパスタソースを拭うようにして、恋人は何切れも食べる。レシイの腕より長く長い一本ぐらゐ、

すぐになくなつてしまふ。

然るに、洗ひ物の最後になつて、珍しくバケツトが残つて居ることにレシイは気付いた。普段は残つて居る分があればそれを全部だつて平らげしまふ恋人が、ほとんどパンに手をつけていないことが導き出される。

台所は社会の、世界の縮図である。其処には経済や政治さえ、小さいながら存在する。レシイにとつても、余りに広大なこの世界のことが何となく覗ける場所である。まして、この家の中で起つて居ることに何となく察しが付くというものだ。マグナに食欲が無かつたということは、レシイにとつては重大な深刻事となりうる。

そして彼は、マグナの恋人という自分の立ち位置を常に意識して居る。自然、マグナを誰よりも観察するし、その表情の変化に対しては敏感で居なければいけないと思つて居る。「愛しています」と言うことが許されて居る以上、其れは獣人少年にとつて実は飯を作ることよりもずっと重い責任が伴う。

その表情が、普段より一分でも翳れば。気になつてはいたのだ、それでも「お帰りなさい」と言えばいつものように彼は微笑んだ。しかしその表情筋を意識して動かしていたふしはなかつたか。見逃していたとしたら、それは何と罪深きことか。

何か悩み事でもあるのだろうか。あるいは、どこか具合が悪いのだろうか。夕べは案外冷えた。布団をかぶつて寝たのは間違いないが、マグナはそう寝相の良い方ではない。いやそれ以上に、

「あ、あのう、ご主人さま」

「ん？」

「そろそろ服を着ないと……」

「まだ大丈夫だよ。それともレシイが寒い？」

ある。もつと強いて服を着せればよかつたのに。

残つたバケツトを包み、明日の朝ご飯に廻そうと決めて、溜め息を吐いたところに、ふわりと湯気を纏わせたアメルが台所を覗き込んだ。「レシイくん、お風呂入っちゃつてね」

「あ、はい、判りました」

風邪なら、お風呂は止めておいたほうがいいのかも。しかし、レシイは自分の夜を思つて、もどかしいような気持ちになる。一緒に寝るのだ、まだ帰つて来てからキスをしていないし、抱き締めてもらつていない。傍目にそう格好いいものではないだろうと想像して恥ずかしくなるから、レシイがマグナを止めるのだ。

しかし、単なる召喚士と護衛獣の関係ではない。心底から恋しく求め合う者同士であれば、肌を重ねたいと考えるのは自然なことだ、二人が二人きりで居られる寝室においては、遠慮がちに不器用に、あまり綺麗とも思えない形で愛情を遣り取りし合いたいと願う、レシイでありマグナである。

つまりは当たり前前の恋人二人である。愛しい人のことを「案ずる」とき、レシイは自分がこうまで男であると思ふことはない。半人前で力も弱く家事は確かにこなすけれど他は何をしなくても中途半端と定義する自分が、ただマグナのこととで頭が一杯になつたときには、極端なくらいに凜と気が漲るのを感じる。

「ご主人さま？」

居室に戻つたレシイは、マグナが何かの粉薬を苦そうな顔をして飲んで居るのを見た。

「ああ……、ん、お風呂？」

「あ……、はい、そうです。すぐ支度しますね」

恋人が無意識を装いながらこつそりとバケツトの中に散剤の包を押し込むのを見た。そしてきつと十分もしないうちに忘れて、レシイが洗濯をするときにくちやくちやくになつたものがバケツトから出てくるところまでレシイは想像する。

「……あのっ」
二人分のタオルと下着を支度したところで、レシイは勇を鼓して言った、「どこか、お体の調子が悪い、んですか？」

「……あの、お薬、いま、飲んでましたよね、ですから……その」

隠し事をされるのはレシイだって得意ではない。無論、レシイだってマグラに隠し事の一つや二つはあるのだ。そしてそのことは居心地の悪さを招き、全て晒して側に居るつもりでも何処かきこちないような気にさせられてしまう。そんな感情は負担だ。

それを踏まえて、隠し事をして欲しくないというの自分のが促さるうか。

だがマグラはまだ薬の苦味が残っているような笑みでレシイの翠髪をくしゅくしゅと撫でて、「大丈夫、何も心配するようなことじゃないから……。お風呂入ろう」

と、レシイの抱えるタオルと下着を請け負うと、先を歩いて浴室へと向かう。

話の切り上げ方が、気になった。愛する相手を疑うと、少年の胸の奥には呼吸の度に疼くような石が一粒転がった。

マグラは口の中に残る消化薬の苦味が中々消えないことに、文字通り閉口せざるを得なかった。ギブソンに貰ったその胃薬は、曰く「胃を健やかにする生薬と酵素を混ぜ合わせたものだから、かなり苦い。だけどその苦味が効くんぞ」とのことだが、口に粉末を含んだ途端に吐きそうになった。鼻が曲がるくらい臭かったし、その後味が中々消えなくて、そうならぬように努めたつもりではあった。眉間に皺が寄っていたかもしれない。

当然のことながら、恋人の前では笑顔で居たいものだ。自分の笑っていることが恋人の笑顔を呼び起こす。レシイの笑顔はきつと誰が見たって心和むものだから、其れを見てこの邸で暮らすみんなが幸せになる。彼らが優しい気持ちで居られれば、外の世界だって幸せになっていいものだろう。そしてそのためには、大前提として自分が笑顔で居なくてはならない。マグラの笑顔の材料はレシイであることがほとんどだ。一方で、苦い薬は彼から笑顔を奪い、眉間の皺の原因となる。笑うために、幸せのために、マグラは浴槽の中に身を沈め、後からそっと入って来たレシイのこゝとを、後ろから抱き締めた。

「あ、あの、ご主人さま」

いつもながら、ほんのりと柔らかく瑞々しい、レシイの身体である。薬はさすがにあれだけ苦いだけあって、胃は徐々に苦しさから解放され出した。側にレシイを置いておくととも無関係ではなからう。どんな夜に抱いてもレシイの肌はマグラに心地よさを感じさせるのだ。たおやかな優しさを伴って、しっとりとした肌はマグラの細い筋肉をかつちりと纏った身体にフィットする。男の子の身体でありながら何処か曲線的で、甘ったるさを感じさせる。特段太っているということもないのだが、お腹には指でほんの少し摘めるほどの脂肪が在って、しかし其れが蜂蜜のように甘い。まだ先月のことだが、思春期——もう少し有体な言い方をすればなら性徴期——を迎えたレシイはホルモンバランスを崩してその身に柔らかな乳房を備えた。ふんわりと膨らんだ乳房は数日で元に戻ったが、その間はこうして後ろから抱いたときにはどうしても其処に手が行ってしまった。興奮すると共に少しの困惑もしたものだ。つまりはその、魅力的過ぎて。もちろん今のレシイがそのときに比べて魅力が減じている訳でもない。マグラにとってレシイはいつだって可愛くて可愛くて可愛くて仕方がなく、其処が膨らんで居ようと無かろう

と、胸には触るのである。

半面、マグラだって気を遣う。まさかレシイが自分に求められることを迷惑がりはしないだろうとは思うのだ。それでも、毎夜のように肌を重ねていることが、自分よりも間違いなく身体は弱いはずのレシイの疲れに繋がっていることには配慮しなければなるまい。日々の労働量なら「家政夫」のような仕事をマグラよりも多いのかもしれないのだ。

毎日毎日毎日、セックスをすることは嬉しいけれど、その小さな身体の負担になるようなことになつてはいけないし。

だから肩から見下ろした平たい胸の粒に、指を伸ばしかけて止めた。

此処で止めたところで、部屋に行つてなお我慢出来るかというところは覚束ないが。そもそも、徐々に快方に向かっているとはいえず、まだ胃が重い。恐らく、マグラが色々理由を捏ね回して今夜このまま寝てしまおうと思うのは、まず第一に其れが原因であるということ、マグラ自身が一番判っているのである。

身体が元気であれば、性欲だって旺盛で、当然のように今夜だってセックスをするのだ。

「温まった？」

「は、……はい」

じゃあ、とマグラはレシイのことを一度、後ろからぎゅつと抱き締めて、濡れた髪の毛の甘い匂いを、今はあまり精確には働かない鼻でも腹いっぱい嗅いで、

「出ようか」

と立ち上がった。レシイは少し困ったような顔をして、それでも「はい」と素直に応じる。何処か少しきこえない、互いに言葉にしない思いが其処に在って、その分だけ雄弁に思いが巡ってしまふ。マグラはレシイの裸身を出るだけ見ないようにならぬが、歯を磨き、寝室まで戻り、布団にレシイを入れた。

「あの、ご主人さま」

布団の中からレシイが視線を向ける。マグナは何と言ったものか少しく悩みながら、ただ拭いただけでろくに梳かしてもいない、恋人の生乾きの髪を指で整えてから、布団に収まった。

「おやすみ、と言って、額にキスをして。」

隣に収まったとき、レシイがまだぼかぼかと温かな身体でぎゅつとしがみ付いてそう言った。全ては俺のつまみ食いの原因であると断じれば、マグナはどんなに小腹が空いていたとしても、ネステイの机の上にあるベリータルトにだけは手を出さまいと思いつめる。

布団の中に潜り込んで、自分の胸にさほど高くも無い鼻をぎゅうと押し付けるレシイの髪を優しく優しく撫ぜながら、レシイの身体がいつまでも随分温かいことに極めて安らかな気持ちになる。子供のほうが体温が高いのだと知識として持っている人は多くても、こんな風に日々感じることを出来るのは、きつととても素敵だ。

「おやすみ、レシイ、と。息で言っ、マグナは眼を閉じた。あまり寝相の宜しくは無い自分が今夜は出来るだけ寝返りを打たずに、レシイの柔らかな眠りを妨げることにはないようにと第一に念じ、第二に早いところ胃が軽くなるというのになあと、祈る。」

部屋の灯りを落とした。真っ暗では互いにもあまり慎重なほうではなく、夜中に起きて足の小指をぶついたりするおそれが在るので。もとより布団の中、マグナの身体にしがみ付いているレシイは少々蒸し暑いぐらいの暗闇の中にいる。

やはり、今夜はしないのだ。マグナの寝息が規則正しいものになったのを感じて、そう理解する。

レシイは自分をそこまで淫らな者とは思っていない。

毎夜のようにセックスをして愛しいひとの身体を受け入れてはいるけれど、本質的に恥ずかしいのは得意ではないし、自分が主をどれだけ悦ばせているのかという点になると全く覚束ない。ただ自分が嬉しくて幸せになれるから「好き」と言うのは傲慢に過ぎると思っている。

「だけ。」

「今夜はしないのだ」と思った瞬間から、何だかそれはとても悲しくて辛いことのように思えてしまう。要するにレシイはしたいのだ。マグナに色々なところに触れてもらいたいと思うし、自分も能う限り恋人のことを幸せにするための努力を払いたい。仮令其れが至らぬ努力だったとしても、その機会を与えられているということはまず悦びになる。

ご主人さまが起きていたら、いまごろどうなっているだろう。マグナが眠りに落ちてから半刻ほど経ってもまだ起きているレシイはずっとそんなことを考えていた。マグナはレシイの身体に触れるのが好きだ、舐めるのが好きだ。見られるだけで恥ずかしいところ、多分とても汚いところに、愛しいひとの舌が這っていると思うだけで破裂しそうになってしまう。のみならずマグナは、レシイの身体の局所にいちいち感想を述べる。その言葉はマグナ自身が認めるとおり、決して語彙が豊富なわけでも表現力が秀逸なわけでもないのだが、レシイは自分の目の前に自分の秘めた場所を晒されていくような気持ちになつて居た堪れないような気持ちになる。しかし同時にマグナが「すごく可愛い」と言う、僅かな救いと思っ、どうにか縫りついたらと、より深い快樂の沼があつて、もう抜け出せなくなる。

僕のおっぱいを舐めて吸って、ご主人様が。「甘い」と笑う。それを聴いて震えた僕の……おちんちんの先っぽを、触って、皮を、剥いて。

蒸し暑い暗闇に熱い息を吐き出した。どうして今夜こんなことばかり考えているのか、理由ははつきりとしている。マグナの体調が恐らく今日、とても良くなって、其れが心配だからだ。恋人が居るといふことは大いなる喜びであるには違いないが、同時にそのひとの身に何かが起こりうることを考えて、必要以上の不安に駆られ、恐怖を抱えることと同義である。マグナはちよつとの体調不良ぐらいでへばつてしまうような脆弱な男ではないとレシイは一番知っているつもりでも、案じてしまうのは恋人であるがゆえのさだめである。極端な話、今夜この身体をこの身に受け容れないでは、もう二度とその機会は失われてしまうかもしれないと、そんなことまでレシイは考えてしまうのである。

そして、いま一つの理由、……レシイが其れを苦しく思っ、恐らくそちらの方が重たく大きい。

先月、初めて自分の胸は膨らんだ。そんなことが身体に起こると思っ、いなかたから、大いに困惑したし、マグナに心配を掛けもした。獣召喚術に精通したミモザと、ある程度は専門的な知識を有していたことを思いだしたマグナが言うには、其れは女性にも起きるホルモンバランスの乱れによる現象であつて、徐々に大人の身体になりつつあるレシイの身体には今後おおよそ月に一度のペースで乳房が膨らみ柔らかくなるような変化が起こりうる。取り立てて痛みを感じたり、或いは身体が極端に重くなつたりすることはないから心配することはないと二人は言っ、うちは一人は「レシイのおっぱい、また大きくなるんだなあ……」とどこか嬉し、もうあつたから、レシイも冷静に受け容れることが出来はしたのだが。

よくよく考えてみれば、其れはこの身体が恋人を強く強く強く求めてしまう瞬間が月に一度来てしまうのだということだ。子供を身に宿すことの出来ないレシイの身体で

あつて、レシイはもちろんそんな畏れ多いことを望んだりはないが、心とは裏腹に勝手な欲を備えた性徴期の少年の身体はまずその行為自体を求めてしまう。端的に言えばその期間は、自分の身体が主と共にあることを意識しないでは居られない、欲が募ることにある種合理的な理由が存在してしまふ。

胸に、そつと触れた。
まだ、平べったい。ただ、元からほんの少し柔らかい。膨らんだ胸でも平たい胸でも同じように愛してくれる主が其処に触れることを強く想像して、レシイは思わず震えた。

淫らではない、と思つてゐる。
しかし想像しただけで、ぞくぞくと熱が身体を走るような氣になつてしまふのは仮令今のレシイにはどうしようもないことであつたとしても、自分の淫らさの証左のように思えて、切ない。

でも、駄目だ、と唇をそつと噛む。だつてご主人さまは……。
「ん……ん」

うなされてゐる、訳ではないと思う。ぐるん、と寝返りを打つて、布団ごと持つて行つてしまふ。いつものことで、下手をするとそのまま狭いわけではないベッドの向こう側に落ちてしまふ。

主は眠りが深いほうで、レシイがぐいといと引つ張つてまたこちらを向かせ、布団を被せても全く目を覚まさないのが常だ。ただ其れはレシイにとつては割合力の要る仕事で、寝そべつたままでは出来ない。時にはベッドの向こう側まで行つてマグナを押し返すぐらいのことまでしなければならなくなる。今夜も布団をしつかり巻き込んでしまつたマグナの腕を解いて、改めて布団をかけ直す。……夕べは一杯抱いて頂いて、布団に収まりなおすなり幸せな心持でたちまち眠りに落ちて、目を覚ますことは無かつた、だから寝冷えをさせてしまつたのかもしれないと、レシイは勝手に申し訳ない氣持ちになる。

布団の上に座つて、静かな寝顔を見下ろす。眉間に皺が寄つてゐるといふこともなく、概ね安らかな夢を見ていてくれるに違いない。

この身体を揺すり起こして「したいです」などと言うことは、愛情とプライドの双方の面から許されない。

とても寂しい、かもしれない。だけれど、側にご主人さまが居る、それは何よりも慰めになるだろう。今はただ、明日の朝、恋人が健やかに目覚めてくれることを願う。それがこのひとの恋人としての僕がしなければいけないことだ。

帯を解く。レシイはマグナに色々の服を買い与えられてそれらを着まわしてはいるが、やはり一番落ち着くのはクリーム色の緩い一揃いであつて、其れを此方の世界に来たばかりの頃に何着か作つてもらつた。だから寝ているときと起きているとき、着替えても同じ格好ということも往々にして在る。ゆつたりとしたそのフォルムの服を脱ぎ、下着だけになつて見下ろせば、下着の前面はツンと尖つてゐる。

マグナに言わせれば「そんな大変そうなパンツ、マメに穿くよなあ」ということで、誓約者の世界で言うところの「禪」がレシイの下着である。自分の身の丈よりも長い白布を股下に通し腰に巻き最後は尻尾の上で締める。誓約者たちの世界における「禪」と異なるのは、メトラルの身体には尻尾が生えているため、布に切れ込みを入れて尻尾の穴を開けていることくらいで、あとは概ね同じものである。

その「禪」に倣つて言えば、前袋、の中の性器は既に硬く勃起している。マグナの手遊びの対象として、普段は耳朶のように柔らかいのにすぐに硬くなつてしまふ、性器である。氣持ちが普段以上に昂ぶつてゐるから、其処もいつもよりきつい熱を持て余してゐるよう感じられた。

「ん……」
そつと、右の掌で包み込んだ。布の内外が熱い。

ひよつとしたら、もう腺液が漏れだしてゐるのかもしれない。レシイ自身も無意識のところ尻尾がふるふると震えた。

「……あう……、ん……つ」

布越しの刺激はもどかしい。主はいつもレシイの細身の性器を指で摘んで、皮の上から扱く。その手付きは優しいはずなのに、レシイにとつてはいつも強すぎる快感となつて、すぐに精液を零してしまふ。露出に不慣れな亀頭が手の刺激によつてか僅かに捲れ、布に擦れる痛いようなむずがゆいような感覚には背徳感さえ伴つて、レシイの身体を甘く虜る。

主の寝顔はとても静かで、清らかであるように思える。一度目を覚まし、このベッドの上で裸身を絡ませ合うときにはしばしばレシイを困惑させるくらい変態的な欲求を口にするのだが、いまだちらが変態かと問われれば。

「う……んっ、んっ……、……あう……どう、しよ……、おちんちん……っ、びくびくする……っ」
淫らな言葉を零しながら自分の身体を玩具にする自分のほうが。

身体は火が付いたように熱く、薄っすらと汗さえ滲んでいる。風呂から出て随分経つというのに、身体の底でぐらぐらと湯が沸いているように感じられて、内奥の水面が揺れるたびに波が起り理性が削られていくようだ。

連れて、寂しさが募る。刹那の快感を求め一方で、やはりどうしても、目の前の恋人が眠つてゐるままであることが、辛い。キスをした、抱き締めて欲しい、触れられたい、……普段なら恥ずかしくて真つ赤になるようなことまで、今はされたつていいとさえ思える。

「ご主人さまあ……」
手は止まつた。発熱したような身体を持て余して、途方に暮れる。起こしたければもつと大きな声で呼ばれば良いのに、どうしても其れが出来ない。呼ばれて眠りを中断することに躊躇いのあるよう

な主ではないと判っていないながら、劣情に翻弄されて居てもなお、レシイはマグナの眠りさえ護りたいたのだ。

恋しさと寂しさは同じ柵に住んでいる。レシイは恋人をこれほど近くに感じながら、叶わぬ願いにほとんど泣きそうになっていた。

夢の中でも「匂い」というものは感じられるのだ。例えばソファで転寝をしているときに、恋人がクツキーを焼いたとしたら、その甘く香ばしい匂いで大抵すぐに目を覚ます。

ソファでの転寝とベッドでの睡眠とは、眠りに対しての姿勢も違うから同質には扱えないが。

「匂い」を感じたのだ。

シンプルに、それだけの理由でマグナは眼を開ける。其れはタオルケットの端っこのような、マグナの好きな類の匂いだった。遅れて感じたのは自分の胃が案外すつきりしていることで、さすがに苦くて臭い薬だけあって効果は高いらしい。

「……ん？」

白い。タオルケットはライトブルー、毛布はベージュ、しかし、白い。

「……ごしゅっ……」

視線を、上げたところにレシイが眼を丸くしている。顔の目の前に在る白いのは何だと思えば、其れがレシイの下着であって、鼻に触れるくらいに近くに在る。

要するに其の匂いだ。

反応は、僅かに遅れて、しかしラディカルに、ヴィヴィッドに、

「うお」

「……ごっ、しゅっ……」

「レシ……ごっ、レシイっ……、……うわあビックリした……!」

飛び起きるといふ言葉がしっくり来る。目の前の、半裸の恋人、泣きそうな顔をして、唇をびくびくさせて、……何やってるんだ。

「かつ……」

それでも、

「風邪ひいちやうよ、レシイ」

そういうことをまず言う。マグナは変態だが、それ以前にレシイの恋人を自覚して過ごす男だった。

匂いというものは鼻に残る。今ふわりと馨ったのが何だったのか、咄嗟に判別しかねる。とてもとても良い匂い、心躍る匂い、何と定義すれば良いのか。

「……ご、ごめんなさい……ご主人さま、ごめんなさいっ、お休みのところ、起こしちやって」

レシイは真っ赤になって謝る。その髪先が少し揺れるそれだけで、ふわり、匂いが漂う気がした。

「うん、あの、起きた……、起きたんだけど、ええと？」

レシイが裸で在る理由、下着の前が膨らんでいる理由、考えを少し巡らせれば、寝起きである上にさほど聡明な男でも無いマグナでも答えに辿り着ける。自分が先に寝てしまったから、寂しさを一人で慰めるほか無かったから、寂しさを子供はマグナを揺すり起こして強請るようなことなど思いつかなかつたに違いない。

しかし、この甘酸っぱいようないい「匂い」の答えにはならない。もとよりレシイの身体は優しい良い匂いがすることを知っているのだが、其れとは別質の。

とても、魅力的な、「いい匂いがするな」と思ったままぼろり口から零れていた。

「え……?」

「お前の身体から……。何だろう、この匂い」

すん、と髪を嗅がれて、レシイは肩を竦める。

耳の先まで真っ赤にして少年は身を縮ませて、か細い声を出す。

「……恥ずかしい、です」

「……恥ずかしい?」

「だって……、だって、僕、いま……」

きゅ、と少年が両手で押さえた前袋の中で性器が苦しげに震えている様子を、マグナは見えて確認するまでもなく把握できた。或いは其の場所から、この芳しい香りは漂っているのかもしれない。

「……そのっ……、なんて、説明したらいいか、判んないんですけど……、あの、僕の、身体、が、その、少しずつ大人に、なってる……、おっぱい大きくなったりとか、そういうのと同じで、あの、その、そういうの、前に……、ご主人さまのことが欲しくて欲しくてたまらなくなってるんです」

普段、そういう類のことはあまり口にしない。清楚と言うにはぎこちないが、恥ずかしがって口籠ってばかりいるようなレシイが、はつきりとそう言った。マグナはぼかんと口を開けて、困惑しきって泣きそうなレシイの顔を改めて見る。

依然として鼻に届く匂いの正体を、掴んだような気になる。

「……ええと、つまりそれはあの、あれか、あの」

何て言うんだっけ。

「あ……、あれだ、発じよ」

「いいいい言わないでください」

「何で」

「だってっ、だってだっただってこんな恥ずかしいですっ、こんなっ、みっともない……、はしたない……、だから自分で片付けようって、ご主人さまだっってお体の調子悪いのに、ご迷惑になっちゃいますし、だから、僕……」

眼が潤んでいる、泣きそうに見える、頬が紅い。

しかし、レシイの表情を形作っているものを拾い上げて単純に「羞恥心」と言う訳には行かないのだと、マグナは理解する。

「そんな困ることなんて何もないと思うけどな」
マグナはようやくしゃっきりとした頭で、明瞭

な声で、きちんと笑顔を見せる。

「俺なんて、お前が居てくれれば一年中発情期みたいなもんだよ。可愛くって可愛くって仕方が無い、いつだって隙在らばお前とセックスしたくてしょうがない」

「発情期」という単語はどうやら禁句らしい、ということとはレシイの表情を見ていて判った。性欲に負けて抗いようのない自分が辛いのだろう。だからマグナはそんなレシイの在り様に、下手な慰めの言葉はかけない。

「っひゃー！」

「いい匂いだ」

抱きすくめて、また、髪の毛の匂いを、首筋の匂いを嗅ぐ。湿っぽく汗ばんだ身体は、発熱しているように体温が高く、それはマグナの寝起きの劣情を呼ぶ。レシイがどれくらいの時間、一人で寂しさを抱えて余していたかは判らないが、まだ下着を脱いでいないところからマグナが思うのは、早めに起きることが出来てよかった、と。

恋人が寂しい思いをする時間は、少しでも短いほうがいいに決まっている。

「普段のお前だっすごくいい匂いなのに、こんな誘うような匂いさせてたら、……たまたまなくなるよ、レシイ」

横たえた体の耳を唇で挟むように言う。レシイの身体は普段よりも感覚が鋭くなっているようで、マグナの掌が肌を滑るだけで声を上げる。

「……俺、レシイと一緒に暮らす以上は、色々知らなきゃいけないと思って」

言いながら、今夜の段階ではまだ平たい胸板に掌を止める。とくとくととくとととと跳ね回っている心音を愉しむぐらいには、まだマグナには余裕があった。

「だから、このところ結構ちゃんと勉強してるんだ、メイトルパのこと、メトラルのこと。……前回のときはほら、お前のおっぱいが大きくなって俺はその理由が判らなくて、お前にも不安な思

いをさせちゃったからね。だから今後はそういうことがないようにして」

濡れた眼に、微笑を向ける。薄く開いたレシイの唇からは、花のような香りの吐息が短く漏れている。キスを一度して、一度だけでは済まなくてもう一度して。待たせてしまったので、すまなくて。

「もう何日かすると、またおっぱい膨らむんだろ。うね。それまでの間はひよつとしたらずーとこのいい匂いがするのかな」

少々悪趣味と取られてしまうことも仕方が無い。だがマグナは嬉しいのだ。普段性欲を乗りこなせなくて困らせてばかりいる恋人が、いま自分以上に欲に翻弄されて自分に縋り付いてくれることが「っひゃつ、やつ、っひゅじんさまっんっにやつ」

細くて柔らかい腕を上げさせて、腕の内側を舐めながら脇の下まで辿る。レシイが声を上げる理由は、くすぐったさだけではもちろんない

「此処かなーって思ったけど、違うみたいだなー」「んなつ、なにが、ですかあ……」

「お前の、この、いい匂いの出所」

自分の身体の匂いなど、自分には判らないものだ。書庫の整理を一生懸命やって帰ってきた身体でもレシイはちゃんと「おかえりなさい、ご主人さま」と抱きついてくれる、しかし擦れ違いざまのネステイに「汗臭いぞ」と指摘されたりする。

思うに、纏う匂いについて、纏っている者自身は無自覚なのだ。いまのレシイだっ自分自身がそんなに性的な匂いを醸していることに気付いては居ないのだろう。その一方で、知らずその鼻で吸い込んで、恐らくはマグナ以上に心をかき乱されている。

「それとも、此処かなあ……、お前のおっぱいはべったんこでも可愛いからな」

ちゅ、と悪戯っぽく音を立てて、尖った胸の先に唇を当てる。汗の潮の味の向こうに、乳頭の微かな甘味が舌に届く。ぷつぷつとしたしこりが引

つ掛かる舌触りは実に愛らしい。そして其処は楽器のように、ひと舐めするたびにレシイに甘酸っぱい声を上げさせるのだ。

「ご、しゅっ、じんっ、さまっ、ん、もおっ、んっ、おっぱいっ、そんなにやつ、しひやらめれしゅっ」

「んー、此処でもないみたいだなあ。でも本当にお前のおっぱいは可愛くって可愛くってしようがない。男の子のおっぱいなのに、どうしてこんなに可愛いんだらうなあ？」

ちゅう、うう、と吸ってやったそれだけでレシイは首を仰げ反らせ、腰を浮かせて空を蹴る。禪の前袋に目をやれば、其処にはぼつりと染みのスポットが出来ており、もはや少年に猶予の無いことを教えていた。

「あと残るのは、……やっぱ此処しかないよな」自分の股間に視線を送られても、レシイに抗う術は無いことをマグナは知っていた。鼻を近づける。確かに、マグナを煽る匂いは其処に端を発しているようだ。

「すっごいな、レシイ、こんな濡らすほど興奮して……。すごくやらしい、でもって、すごく可愛いよ」

少し緩んだ前袋はレシイの陰茎で持ち上げられ、両脇からは陰囊が覗ける。レシイの肌は元々白いが、勃ち上がってひくひくと震えている陰茎は微かに赤らんでいる。

「こんなに」布の上から染みに指を当てる。ぬるりと確かに滑る

「ひ、あつ……」

「ガマン汁漏らすくらい感じてるんだもんな……。もういきたい？」

布の上から、レシイのペニスの輪郭を辿る。生かさず殺さずという言い方は残酷だが、レシイのことを、ぎりぎり射精まで至らしめない程度には心地よく指で愛撫して、レシイがはぐれそうな言

葉を必死に掴みなおすために唇を開け閉てするのを見る。

「……つきたい、ですつ……」

顔を覆って、レシイが声を絞り出した。

「んー？ ちゃんと喋ってくんなきや判んないぞ？ このまんまパンツの上からうにうにしてるだけでも俺は全然構わないけど？」

「やつ……、そんなの、したらあつ、汚れちゃいますつ、だからつ……」

「俺はお前が精液おもらしするところも可愛いと思うけどなあ」

「い、やつ……やですつ、ちゃんと、脱ぎますつ、だからつ……」

恋人をいじめることがそうそう愉しくつても困るのだが、必死なレシイを見るのは単純に愉しい。

夢中になって、なり振り構わずに、淫らな姿を見せてもらえるということは、恐らく恋人と過ごす夜の時間でもっとも幸福なことではなからうか。

「じゃあ、見せて。いきたくつていきたくつて仕方なくなつてる、はしたないお前のちんちん」

きつといい匂いがするんだらう、そしてとびきり可愛いんだらう。知っているくせに、レシイが身を起こし、恥ずかしそうに禪を解いていく間、

やはり改めて胸が高鳴る。レシイの顔も下半身もいったいこれまで何度見てきたらう。何度目かで飽きるくらいなら一緒に居られない。

レシイはマグナの視線をちりちりと刺さるよう

に感じながらも、恋人の求めに応じて強張りそうな指で禪を解いてゆく。ずつと双丘に食い込んで

いた股下が緩んだときには、何だか気が遠退いて

そのまま射精してしまいうな気になる。震えそ

うな身体をどうにか堪えてベッドの上に膝で立ち、

性器を晒した瞬間に、また射精の波が襲い掛かる。

「すごいな、……先つぼぬるぬるになつてる」

射精間際の震えまでつぶさに観察されて、しかしレシイの中で巻き起こるのは羞恥心ばかりではない。

「ひやうつ……、ご……主人、さまつ……」

マグナが顔を寄せて、其処の匂いを嗅いだ。ひゅ、と通り抜ける冷たいような風に、腰から力が抜けそうになる。察してマグナが腰に手を廻して支えた。

「やっぱり此処だったな」

マグナは密やかに笑って言い、「いいよ」と付け加えて、レシイの幼茎を口に収めた。

「ふ、あうつ、ンツ、うあ、ごしゅつ、じ、さまつ、あつ、ふあつ、あ！ いッンつ……つひやうああつ」

まずマグナが感じたのは、汗の潮の味だ。そして交じり合いながらも其れとは異なる、くつきり

ととろみを帯びた腺液の味。寝る前におしっこに行つたから、やはりその味の含まれている。だ

が詳細を味わう余裕は無かつた。鼻に抜ける強い匂い——性器そのものの纏う本来の匂いと、普段

の其処にはない甘酸っぱい果実のような——がたちまち全てを覆い隠す。

そして、震えと共にもたらされた濃厚な精液の

着い味が舌に乗って、上から塗り潰した。夕べも

セックスをしたというのに、レシイの精液は重い

舌触りで、少年の身の中に少年自身どうすることも出来ない欲が積もっていることをマグナに教える。

「あ……あ……」

口から抜いたばかりの性器は、強い引き波に翻

弄されるように、未だ小刻みな震えを繰り返して

いた。マグナは慰めるように今一度先端をちろりと舐めてから、少しの癒しになればいいと、陰囊にも舌を伸ばした。其処は乳首ほどレシイを困らせる場所ではないが、それでも単なるくすぐったさとは異なる感覚でレシイを苛む。舌先で音もな

つまででも悪戯してやりたいような愛らしさを纏う。

「ごしゅじ、さまつ、もお……つ」

きゅ、と髪を押さえたから、一先ずは止めにしたが、改めて眺めたレシイのペニスに勢い止まず、寧ろ射精の強い快感を繰り返して求めているかのよう

だ。レシイ自身も収まりどころのない欲をどうすればいいのか判らないように困惑しきつて、縫

るような眼をマグナに送る。

だがマグナだって、男だ、レシイの恋人だ。これほどの姿を見せられて、ただで居られるはずもない。

「もう……、可愛いなあ、えっちなレシイはすごく可愛い」

だから、「ただで居られない」ことは、自分だけのせいではないと言うように、パジャマのズボン

から性器を取り出して、見せた。

「俺のと比べると、全然違うよな。ぎんぎんに勃起してるのに何だかお前のは可愛くつて困る。俺のは見苦しくつて困るよな」

言いながら、レシイの視線が自分の怒張に釘付けになつていくことは先刻承知だ。

「まあ、成長してこうなつてくのは仕方ないんだけどさ。お前にしか見せないし、逆にお前の可愛いちんちんだつて俺しか見ない。だから俺たちだけに価値があればそれで十分かも知れないよな」

レシイにどれだけ言葉が届いているか、マグナには判らない。一方でマグナも自分があまり理の

通らないことを言っているかと判っている。

「ほら、こんなん、……自分の物ながらみつともないな」

先端に、露が浮かんでいる。レシイの口は開き

つ放しになつている。

「……レシイ？」

もないもののように感じられるのだが、それでも油断すれば視線はまた、其処に落ちる。

「俺も、してもらえたら嬉しいんだけどな」

言葉がレシイの中に浸透し、その身を動かす理由となるまでの過程を、マグナは覗いているような気になった。思ったとおり、レシイはベッドに座ったマグナの足の間に這い蹲って、ペニスに顔を近づけて。

まず、先端に浮かんだ腺液を舌先で拭き取るように舐めた。それで火が付いたように、その口にはやや大きいサイズの陰茎を咥え込む。とろとろに濡れた舌と唇で、品のない音を立てながらのフエラチオは大いに心地よいが、その喉が苦しいのではないかとマグナとしては少し、案じたくなるくらい積極的だ。

「……ほんとにもう……」

時に見せる、少年の淫らなありようは、稀だからこそ特別な価値が在るのだとマグナは考える。

レシイは本質的には品の良い子だ、それはもう、おりこうさんだ。マグナよりも余ッ程しつかりしている、見習わなければならぬ点が多すぎて困るくらいだ。

然るに、そんなレシイが時々——今後は恐らく定期的に——見せるセックスに対してアグレッシヴな姿勢は、他の家人たちには倫理的で模範的な存在のように見えているであろうレシイも秘部を持つていて、其れを見て良いのは自分だけなのだという満足に繋がるし、レシイも自分にだけは晒してもいいと思っているように解釈できて、嬉しい。

「ふあ……う、……ん、ご主人さま……」

さすがに口一杯に頬張り続けることには苦しくなったようで、龟头への細かな刺激へ切り替えた。左手で身を支えながら右手では竿を抜き、ちろちろと小刻みに動かす舌先で龟头を愛撫する。

「……ご主人さま、の、おちんちん……、すごく、熱いです……」

「ん……。レシイにちんちんもさつきすぎく熱かった、……今もきつと、熱くなってるんだらうね。でもってびくびくさせるとさ、お尻の穴も一緒にヒクヒクしてるんだよな」

品のない言動なら、マグナの得意とするところだ。いや、当人はさほど下品なつもりもないが、ネステイあたりには言わせれば「僕の側で弁当を食べるなら食べながら喋って物を飛ばすな」ということで、……さすがに音を立てて物を食べてはいないと思うけれど。

レシイは恥ずかしがって、顔を伏せてしまった。マグナは己の言葉を己の耳で聴き、実際どれくらいヒクヒクさせてるんだらう、そんなことが気になって仕方が無くなった。濃密なレシイの甘酸っぱい匂いに駆られ、マグナの欲も普段以上にヒートアップしているようだ。考えるより先に身体が動いていた。

「んひやつ、ひやつ、ごひゅじんさまつ、にやつ」
レシイの身体を逆様に乗せて、尻尾の付け根を下から覗く格好だ。普段のレシイはこの体勢が恥ずかしくって仕方がないらしく、大抵はいつも、頼まなければしてくれないのだけれど。

「ごしゅ、じん、さまあ……」

困惑した声は上げるものの、抗うことは全くない。隠すこともしない。だからマグナにはレシイの陰囊の裏側から続く筋の先、恥ずかしげに窄まっている肛門をじっくりと観察することが出来た。やはり其処は窄まっているばかりではなく、僅かに緩み、しかしすぐにまた窄まる。触れて確かめるまでもなく、レシイのペニスはその動きに連れてひくついていることは疑いようも無かった。

「うあ……あん……つ」

触れた途端に、きゅうとレシイの孔はやはりきつく窄まった。先端からは再び露が溢れ、勃起してようやく覗けるレシイの龟头は粘液に濡れている。疎んだようで、しかし垂れ下がる袋が愛らし

いというだけの理由でマグナは其処にキスをした。「んっ……う……」

レシイは微かに尻を揺らめかせる。眼前に在る恋人のペニスに愛撫しなければいけないと判っているのだが、股下から覗かれる状況に募る羞恥心が、何やら露悪的な感情を喚起する。「こんな恥ずかしいところを僕は見られている」と思えば思うほど、却って興奮が襲い来る。

いったいどうしたら、この熱から逃れられるのだろうか。こんな淫らで無様ではしたくない護衛隊で居て良いはずが無いと、苦しささえ覚える。こんな夜がしばらく続いて、主を疲れさせてしまうのだろうかと思えば、恐怖に似た感情さえ巻き起こるのを止められない。

しかし。

罪科を恐れる気持ちさえも、この夜には少年を昂ぶらせるスパイスとなる。

「どうした？ レシイ、お尻が落ち着かないな？」
尻に掌を載せてマグナはレシイの下腹部に向けて訊く。もちろんマグナは誰かに尻を弄られたことがないから、レシイがその部分に感じる焦熱を知らない。

「どうしたらいい？ どうして欲しい？ お前のして欲しいこと、何でもしてあげるよ」

だからマグナはこうして素直に問う。本当のところを言えば、レシイと繋がるにしたって、本当にレシイが痛くないのか傷つかないのかということに関しては、痛がらせぬように傷つけぬようにと気を遣っていてもマグナには覚束ない。だから無責任かもしれない、レシイの言葉だけを根拠に行動するほかない。

レシイは言った。

「お尻……つ」

マグナのペニスを緩く握ったままで、

「……ごしゅ、じんさまにつ、お尻、弄って欲しいです……！」
其処まで言って、レシイは吹ッ切れたように声

を上げた。

「ご主人さまにっ、僕のお尻……、いっぱい舐めてもらったりっ、指でぐちゅぐちゅ弄ってもらったりっ、……おちんちん入れて欲しいですっ」

恥も外聞も捨ててレシイが口にした言葉に、真摯に向き合う。発情期を迎えた恋人の在るがままを「可愛い」と、「愛しい」と、同じ以上に素直に受け容れることだけしていれば良い。

そういうことを、マグナは瞬時に理解する。その上に自分の欲を乗せて、

「わかった。お前のお尻、一杯気持ちよくして、幸せにしてやろうな」

レシイの其処は待ち侘びているように見えた。マグナはレシイが「汚い」と言うその場所が、

どうしても汚いとは思えない。だって神々しいくらい、包容力の在る場所、俺を受け容れてくれる場所。むしろつまりそのあれだ、俺なんかの汚いもんが入っちゃって良いのかどうか、ときどき真剣に不安になって、風呂に入るたびによく洗うのだけれどそれでもまだ覚束ないような。

つまり、舐めることに何のためらいもない。「ひ……あ……っ」

レシイの指がくしゅりとマグナの性毛に絡む。いいよ、感じていいよ、楽しんで。そう思ってもまだレシイには愛情に基づく意地のようなものが残っているらしく、マグナの性器に口付けをする。のみならず、舌を伸ばし、マグナの意識とは関係なく滲み出る露を掬い取る。

「ごしゅじんさまあ……っ」

しかしその意地もそう長くはもたない。当然、そんな意地など要らないよ大丈夫と言う代わりに、マグナが舌を使うからだ。頑なであるはずの場所は、しかしマグナが何度も何度も舐めるに連れて徐々にガードが甘くなり、舌先が入口の環状筋を掻い潜り、僅かに中まで届くようになる。

「んにゃ……はあぁっ、お、尻っ、のっ……」

く可愛いお尻の中に、俺の舌が這入ってる。

気持ち良い？

そう訊く代わりに、内桃に指を滑らせる。レシイにはそれだけで、十全に伝わるようだった。

「は、いつ、お尻……っ、こんなの……、いけないのに……っすごく、いけないの……っ……どうしよう……っ……気持ちいい……っ……お尻すごく気持ちいいよう……っ」

レシイが敬語を忘れた。其れはマグナを興奮させるには十分すぎる現象だ。もっともっと、恋人を狂わせたいなどと邪な欲が頭を擡げるが、いまのレシイにはこんな自分もまた相応しいのだと思うことにして、十分過ぎるほどに濡らした孔に指を挿入した。

「ひゃっ……」

レシイの腰が弓なりに反る。尻尾がびんと張られ、びりびりと震える。マグナの性器が何度出入りしても其処だけは清純さを喪うことはなく、いつも新鮮すぎるリアクションを示すのだ。内壁を指の腹で擦り上げ、射精間近のことを告げるように皺の寄った陰嚢を舌先で擦る。それでも、まだいかせたくはない、恐らくレシイがそう望むようにマグナも望むのは。

「……一緒に良い。」

「ふ、ふあぁ……、あっ、僕っのっ、お尻っ……！」

「うん、聴こえるか？ ぐちゅぐちゅ音立てて、……俺の指、握ったり離したりしてる。俺のちんちん欲しくて仕方ないって言ってるみたいだよ」

普段ならば真っ赤になって泣いてしまえばかりのレシイの抗いは、今宵に限ってはぎゅうと握って返すくらいのものだ。「発情期」という単語が、

こうして実感を伴ってマグナの中に浸透する。いまなら、きっと何を頼んだってしてくれるの

だろう。

しかし、マグナが求めるのは、「何が欲しい？ 言っよ。俺の顔見ながらさ、俺の目え見て、何処に何が欲しいか、俺に教えて」

そんなこと。

「う、あう……」

指を抜いて、ころんと横になったレシイを抱き起こす。レシイの身体はまだまだ、マグナの腕の中での収まりがとても良い。マグナはもう間もなく成長期の終わりを迎えるが、それなりにふんわりと大きく育った。

出来ればレシイが大人になっても、こんな風に据わりの良い腕であつたらいいと願う。

「う、あの……」

レシイは顔を覗き込まれてもちろん戸惑うが、マグナから目を逸らしはしない。ぱつちりとした、濡れた双眸は、睫毛を微かに震わせて、

「……僕、のっ……、お尻……っ……お尻に、ご主人さまのおちんちん、挿れて、欲しい、です……っ……、ご主人さまのおちんちんでっ……っ……、気持ちよくなつて、ぎゅうつて、して、ご主人さまの……っ……精液、を、僕の、お腹の中に、欲しい、です……っ……」

其処まで、レシイはちゃんと言い切った。すぐに顔を覆ってしまう。その手の甲をマグナは舐めて、「おりこうさん」と芳う。「良い子」と。これほど淫らになる瞬間が確かに在っても、やはりレシイの本質はどこまでも、氣立て良く賢く優しくそして強い、良い子なのだ。マグナは信じて疑わない。

枕頭の鮎色の光に照らされた顔を、自分の顔で陰にしてしまうことは何だか申し訳ない気がする。

「好きだよ」と言うときの自分の顔を見られるのが正直恥ずかしいのだ。

「ん……僕、もっ……ご主人さまが、大好き、です……っ……」

舌を絡める。互いの性器を舐め合っていたことを、まずレシイが何とも思わないようにマグナも

思わないことにした。接続は唇から始まり舌に繋がり腕でしっかり身を抱き締め合い、最後には一番弱いところで、僅かに臆病になりながらもしっ

かりと、自分たちがこうして在ることが真理だと

青臭いようなことを思いながらも、信じられるだけの強さを伴って完成される。

「ふあ……っ、ごしゅ、じんさま……！」

「ん……、全部入った。……レシイの中は、やっぱりきついね、ぎゅうううって俺のちんちん握り締めてる」

「……う、うう、だ、つて……」

いいんだ、とマグナは掠れた声で囁き、レシイの耳に口付けの音を贈る。

「気持ち良いし、俺はレシイのくれる力の一つひとつだつて、幸せに思えるから」

マグナのペニスに与えられる圧力は、レシイの薄い内壁から通じてくる。それだけに、とてもリアルなものだ。肌と肌の、内と外で重ね在って、結局心臓には届かないけれど、自分も相手も同じリズムでビートを刻んでいることを伝え合うための手段は第一義ではないにしろ、マグナとレシイのセックスの、彼らが素敵と思う要素だった。

「俺、多分あんまり我慢できないと思うけど、いいよね？」

腰を動かす前に、マグナは一応断った。繋がったことで一際強くなったレシイの甘酸っぱい匂いに、これ以上耐えられるとは思えなかった。レシイが声もなくこつくりと頷いて、また唇を求める。

あとはその両方に、応えるだけ。

「んあつ、あ……っ、ふう、ううあつあ！ あつ、んうっ、お尻っ……ごしゅじんさまあつ、……ごしゅじんさまあつ、お尻っ……、しゅ、ごいっ、熱くてっ、……おちんちん熱くてっ……おかしく……おかしくなつちやうっ、もおっ、おちんちんいっちやうっ」

レシイが、再び敬語を忘れた。しかしそのことに感動を覚える余裕はもちろん今のマグナには無く、射精のタイミングを少しでも遅らせながら腰を振り、レシイの締め付ける力を味わうことで一杯だ。

「……つく……、いく……っ、レシイ……っ」

「ツンっ、僕のっ、ぼくのナカっ、ごしゅじんさまの……っあうあああつ、れ、てるっ、おちんちんびくびくしてっ、ごしゅじんさまのせーしでてるっ……、僕の、……お腹っ、のっ、なかあ……！」

蜂蜜のように甘い声と共に、レシイは性器を痙攣させて自らの下腹部に精液をとろとろと零す。マグナの性器を何度も何度も確かめるように握り締め、力の抜けそうな腕を叱咤して、また抱き締めなおす。マグナが同じ力で返してくれたことが嬉しくて、涙がぼろぼろと零れた。キスをして、舌を絡めて、……まだ繋がったままで。

身体の奥底ではまだ火がばちばちと燃えているような気がする。感情の水面はまだ揺れ動いているように思える。それでもレシイは、主が優しく微笑んで、「……ごめんな、先いっちゃって。もう、全然我慢出来なかったよ」と謝った声に、ふるふると首を振る。そっと性器を抜かれて、未だ性欲の収まった気はしないのに、身体の中にマグナの命の欠片がもたらされたことを感じれば、不思議なほど満ち足りた気になっている。

そして、思い出す。

「……ごめんなさい、ご主人さま……」

不意に悲しそうな顔を見せた恋人に面食らって、マグナは訊き返した。

「……お体の、具合が、悪いのに……、付き合っで頂いて……」

とマグナは目を丸くする。そして、確かに忘れられるくらいに、自分の胃腸がちっとも重たくなことを思い出すのだ。

「あ……、ああ、ああ……、えーと、うん、そうだね、もう具合は、大丈夫。先輩から薬分けて貰って、多分其れが効いたんだと思うよ」

「……ほんと、ですか？ 季節の変わりめは風邪をひきやすいんです。僕はもっご主人さまの健康に気を遣っていなきゃいけないのに……、こんな……」

「いや、いやいや、いやいやいや、その……大丈夫、全然大丈夫、なんだっただらまだあと三回くらいはできるくらい大丈夫だから」

まさか、ネスティのケーキを盗み食いたせいで胃もたれしていたなんて、真剣な目をする恋人に言えるはずが無い。

「な、だから、心配するなよ。俺はすごく丈夫だよ、そんな、さ、風邪なんかひくわけないだろ」

だって馬鹿なんだから、と言いかけて、「夏風邪は馬鹿がひくものだ」と去年の夏に風邪をひいたときネスティに言われたことを思い出して飲み込む。レシイは一応、納得してくれたらしく頷いたが、それから衝動に駆られたようにぎゅうと抱きついた。

「……ずっとお側に居させてください」

「……ん？ うん」

「だって……、僕は、ご主人さま居なくなったら……生きていけません。ずっとそんなこと、判っていたのに、今夜……」

この身体が、そう、強く、教えてくれました、とレシイはマグナのマジマに言葉を潜らせる。

「ご主人さまが欲しくて欲しくて、たまらなくなりました。……いまは、少し、我慢できる気がします。ご主人さまが……、僕のことを、ぎゅって、してくださって……でもって、僕の……、その、中に、……ご主人さまが生きてる証拠を下さいます。それが……、すごく幸せなんです。すごくすごく、嬉しいんです。僕はご主人さまに気持ちよくして欲しいんじゃないかって……その、つまり……」

胸から、レシイが顔を上げた。その顔はいつもの通り愛らしく、幼く、しかし凛々しい光を宿しているように、マグナには見える。

「僕の……、こういう、性質、こういう風になつてしまう時間は、ご主人さまのお側で生きてることの幸せを、ちゃんと僕が身を以って理解して、忘れないで居るために必要なんです……きつと、」

「そうなんです」
 そう言ったレシイを、ほとんど無意識に抱きすくめていた。ああ、そりやそうだ、そりやそうだよ、俺だってそうだよ、うん、……でも言われるまで気付かないんだ、やっぱり少し、馬鹿なのか……、口に出す余裕はなくそんなことを考えた。

マグナが今後気をつけなければいけないのは、発情期の恋人がとても積極的でまた普段どおり魅力的だからといって、調子に乗ってあまり何度も何度もしないようにする、ということ。

レシイは何度だって求めるし、マグナも愉しいし幸せなものだから、何度だってしたくなってしまう。マグナの性欲はレシイが絡めばとことんまですぐに強くなり、収まるところを知らない。つまりマグナが冗談めかして言った「一年中発情期みたいなもの」は、みたいなものどころか本当にそうなのだ。

「……うう……」

寝坊をした。
 遅刻をした。

背中が痛い。
 足腰が重い。

但し、胃腸の調子は良好。

面倒な仕事を押し付けられて迎える午後三時。マグナが寝坊をしたということは即ち彼を起こすべきレシイも盛大な寝坊をしたということである。少年の身に無理をさせてしまったことを、遅刻をして叱られて抱くよりも強く反省する。

「……むしろ絶対、レシイを抱くのだ。」

予め約束された数時間後は、この一組の恋人が幸せに在り続ける限り何度だって訪れるし、彼らが破綻を迎えることなど太陽が割れるよりも確率

が低いのであって、ただマグナはそれを無邪気に期待し、一生懸命勉強に励み、仕事をしていければいい。そうすれば多分、ネステイも文句は言わなはずだ。

マグナにとっては小言製造機であるネステイは、今日も勉強会があるとかで居室からさつき出て行った。二時間くらいは戻ってこないはずである。しかし戻ってくるまでに課せられた仕事を終わらせて居なければ、また何を言われるか判ったものではないと、急ピッチに筆を動かす数十分で大半を終わらせて顔を上げたとき、マグナの鼻には香ばしい蜂蜜の匂いが届いた。

「お……」

不慣れた立ち姿、少し不安げに、部屋を覗いた恋人は、安心したように微笑む。

「レシイ……、びっくりした。どうしたんだ？」
 レシイが派閥までやって来ることなど、滅多に無い。たまにマグナが弁当を忘れたときにやって来ることもあるくらいで、それはレシイが気をつけていけば回避できること。だからこのところは全くと言って良いくらいなかったことで、手には、小さな包みを持っている。

「えっと、……ご主人さまに差し入れを持って来ました」

ネステイの椅子を勝手に引っ張ってきて座らせる。レシイから受け取った包みの中には、可愛らしいビスケットが入っている。

夕食には差し障りのない、しかし小腹を塞ぐには丁度良い量の。

「嬉しいな。いつもこのくらいの時間になるとちよっとお腹が空いて、甘いものが欲しくなるんだ」

「朝、お疲れの様子でしたから。……疲れているときには身体が甘いものを欲しがるとすよ」

ネステイさんは？ とレシイは少し案ずるように言った。しばらくは戻らないよと教えたら、
 「そうですか……」
 ほんの少し服の帯を弄って、口籠る。その言葉

を解き放つ必要はないと、マグナは決め付ける。
 紅茶を入れて一緒に食べよう、そう言うより先に、レシイの頬に指を当てて、キスをした。「夜」までの繋ぎに適量の、しかし愛情の詰まった蜂蜜を、マグナも用意できるのだ。

アトガキ

七松

初めましてかお久しぶりです！ご購入ありがとうございました！
発情 SWEET の発情担当七松です！
今回はマグレシでなくレシエロに特化させようと思ったんですが
(表紙にマグナがないのもそのため)
蓋を開けたらなんかまた一段とマグナがキモイな！おかしい。
今回もやってるばかりな内容で読んだ皆様も
内容が無いよう！なんてギャグを飛ばしてることと思いますが
なにそんな薄ら寒い駄洒落言ってるの？

ごめんなさい！本投げないで！ちょっと突っ込み気取りたかったの！
つかいいじゃないか別に！
今までだって内容があったモノなんか描いた覚えはないですよ！
…あれ？なんか涙が。
まあでもとにかくマグレシはこれでいい気がするのです。
イチャラブでエッチしてれば
俺はハッピー。みんなガッカリ。
でもすこしでも楽しんでいただければ幸いです。

村岸

ヒサブリレシィ！
レシィの下着が禪だったらいいなと思います村岸健太です。
禪祭 FEVER ☆
いやあ、発情期ってホントにいいもんですNE ☆
獣人とその恋人に訪れるスペシャルウィーク。
幸せ一杯タスカータソルテ。
いつも以上にラヴハイテンション。
マグナとレシィにそんなハッピーなアクシデントを
どんどん飛越してさらに絆を強めて行っていただきたいのココロ。
発情期のレシィのミルクはめっちゃ SWEET なんだよね！
たぶん、そういう意味で『発情 SWEET』。
レシィはホントに SWEET、
SWEAT までも
きっと SWEET。
なんてことを考えて書きました！
ほのぼのと愉しんでいただけたらいいなー。
ではまた！

オチ

発行日 2010/6/27
発行者 fanta/stick (egodance+sayonara)
印刷所 HOPE21様
連絡先 SNC00514@nifty.ne.jp/
uragoe_anticlimax@hotmail.co.jp
サイト egodance <http://homepage2.nifty.com/ulstar/>
sayonara <http://haruka.saiin.net/~anticlimax/>

未成年の方の
読む見る、買う、持つあげる、
振り回す、口に、含む、投げる、飾る、武器にする、
急なお客様のお持て成しに使用する事を禁止します。



発情SWEET ADULT ONLY

2009.27 PRODUCED BY
Hentai Stick

EGORUNCE
BY
SAYOHANA



2009.02.27

AMULET

PRODUCED BY
KONTAK/STICK

EGODANCE
&
SAYONARA